

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	1173800275		
法人名	NPO法人ひばりの里ネットワーク		
事業所名	グループホーム加須ひばりの里		
所在地	埼玉県加須市久下1625-1		
自己評価作成日	平成29年7月5日	評価結果市町村受理日	平成29年9月11日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kai gokensaku.mhlw.go.jp/11/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 ケアマネージメントサポートセンター		
所在地	埼玉県さいたま市中央区下落合五丁目10番5号		
訪問調査日	平成29年7月26日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

当法人は設立17年になり、当初から地域との連携に力を注いできました。2か所のグループホームの両方で取り組んでいます。この加須ひばりの里においては、住宅街に存在する為、特に近隣住民や町内会との連携は必要不可欠です。力を入れて来たこととしては、畑を借りて地域住民との交流を目的とした「芋ほり収穫祭」。敷地内の中庭で開催する夏祭り(現在は暑いので秋祭り)。運営推進会議における町内会長との連携などです。その結果、現在では、当事業所の避難訓練に町内の防災関係者10名が揃って参加して下さい、また、防災備蓄品の保存品目や個数等を町内会と情報交換をして互いに支え合う協力体制ができた事は大きな成果であると考えています。また、推進会議では、町内会長と日程を調整すると会長が民生委員や老人会長にも集合をかけて下さるので大変助かります。今後も地域に存在する意義を確認しながらしっかりと地に足つけた活動をして行きたいと考えています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

・地域に開かれた事業所として、家族や行政、運営推進会議との連携を根気よく繰り返し働きかけることで、近隣との信頼関係が生まれ、地域に根差した事業所運営が行われている。また、利用者とは個々の生い立ちや生き方をもとに「好きなこと」を最優先に思いを大切に支援に取り組まれている。
 ・ご家族のアンケートでも、「本人が穏やかに過ごしているのが感じることが出来たのでこのGHでよかったなと思っています」、「カラオケをしたり、何かを作ったり、体操をしたり、自分の家にはできないことをしていただいています」などのコメントが寄せられ、ご家族が事業所・職員の対応を信頼され、満足されていることが伺われる。
 ・平成27年度は厚労省通知の要件を満たし、外部評価の実施は緩和されたものの災害対策や地域の子供たちやボランティアとの交流、運営推進会議の充実などに取り組まれ十分な成果を得られている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	66	職員は、活き活きと働いている (参考項目:11,12)
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)		

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	理念は事務室や玄関に掲示し、職員がいつも目につくような環境にしている。理念の内容は地域密着型サービスに沿った内容になっている。	会議開催時に理念の唱和を行い、常に理念を意識するよう取り組まれ、新しい職員には現場を経験させながら、ケアの一つ一つと理念との結びつきを説明することで、法人が目指す目的の理解に努められている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	事業所が地域の一員として存在できるように行事や貸農園等で地域の方が気軽にホームに入りできるように工夫している。ボランティアも多く協力してくれている。	やるべきことを根気よく繰り返すことで、町内会を中心に人とのつながりを作り上げ、地域のニーズに耳を傾け、交流に努められている。夏祭り、防災訓練、ボランティア、子供たちが参加する芋ほり収穫祭など、幅広く付き合いをされている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	認知症カフェを定期的開催し、認知症家族の居場所づくりに努めている。「介護相談所」の看板を掲げている。理事長はサポーター講座の講師として学校や地域で活動している。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議では、毎回、自由闊達な意見交換が行われ、利用者の様子の報告、外部評価や防災対策等について話し合い、出された意見を反映している。町内関係者は協力的である。	運営推進会議においては参加者と事業所との意見交換が活発に行われ、防災などについても事業所の現状を視ていただいたり、ボランティアやイベントの地域の情報を伺うなど、事業所の運営に活かされている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	市町村職員の認知症サポーター講座の講師を理事長が行っている。また、地域密着型サービス事業所連絡会をつくり、市町村職員に毎回オブザーバーとして参加してもらっている。協力関係は良好である。	敬老の日や市民ボランティア団体の催しなどに参加され、良好な関係が築かれている。運営推進会議や市内事業所連絡会には市担当者が参加され、行政に関する連絡事項や防災についての情報などをアドバイスいただいている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定義準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	玄関に身体拘束禁止のポスターを貼り、スタッフに周知すると共に日頃から会議等で身体拘束については認識の共有を図っている。	常に利用者の側に立った言動に心がけられ、拘束の意識がなく行ってしまう不適切な対応については、その場で口頭で注意を行い、「なぜ、それがダメなのか」を丁寧に指導し、初期段階で芽を摘むよう努められている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	日本GH協会の研修に参加している。また、内部研修を行なっている。玄関に虐待防止のポスターを貼り、スタッフに周知すると共に日頃から会議等で虐待については認識の共有を図っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	玄関に権利擁護・虐待防止のポスターを貼り、スタッフに周知すると共に、日本認知症グループホーム協会の研修等にも参加させたり、ホーム内にて実践している。後見人が選任されている利用者もいる。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約の締結には、利用者やご家族に十分説明をし、不明な点の説明をしている。改定については文書で説明し、理解・納得のサインをもらうようにしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	利用者や家族が意見を書いて入れる「意見箱」を設置しており、意見が反映されるようになっている。また、面会の際にはできるだけご家族と会話してコミュニケーションをとるように努めている。	利用者・家族との関係はオープンで、「墓参りしたい」、「〇〇を食べに行きたい」などの要望には積極的に支援がなされている。面会の家族には笑顔で接し、気軽に話ができる雰囲気作りに努められ、貴重な意見をいただいている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	常勤社員は全員が法人の会員となっており、総会に出席して意見がいえようになっている。日頃においてもスタッフ会議等で意見交換をしている。	スタッフ会議の場だけでなく、日常的に利用者のための介護技術の工夫などを話し合い、ベテラン職員と新人とのコミュニケーションも図られている。管理者も率先して職員の話聞き、精神的な面も含めたフォローに努められている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	人事評価表を作成し、キャリアアップのしくみを整えている。また、処遇改善加算が評価によって公正に配分されるようなしくみも整えている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	代表者は公益社団法人日本認知症グループホーム協会の理事であり、埼玉県支部支部長でもある為、支部の研修には積極的にスタッフを参加させ、向上に努めている。また、その他の外部研修にも参加を推奨している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	代表者は市内で地域密着型サービス事業所連絡会を運営しており、同業者と情報交換ができる為、スタッフをできるだけ参加させて相互の交流に努めている。GH協会事業へも参加させている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居時には、家族と共に面談をする中で、不安なことや困っていることを引き出す努力をしている。また、初期の段階では一番「安心」が保てる環境づくりにつとめている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	契約の時点で十分家族からの聞き取りを行ない、希望や要望を書きとめる。それを職員が目につくようにファイルし、家族や本人の望むケアに繋げている。家族が面会に来た時には気になる点を聞くようにしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入居の相談の時点で聞き取りをする中で、その状況によってはデイサービスで様子を見て在宅生活が継続できる可能性について説明をし、家族と意見交換をした上で、デイサービスの利用に繋げたケースもある。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	職員は、利用者への対応を介護の対象者としてだけの見方をしていなく、尊敬、尊重をしながら「暮らし」を意識してもらうように接している。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	職員だけのケアではなく、ご家族に協力してもらい本人にとって良い「住ごこち」になるようにつとめている。共に支えていくケアを実践している。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	まず、ご家族が面会に来やすい環境に努め、飼っていた犬が面会に来たり、お孫さんが来たりすることを歓迎している。行きつけの美容院にもお連れできることを家族に伝えている。得意だったことを続けてもらう。お墓参りにも行っている。	入居前から身につけていた畑仕事やペットの世話などの継続には積極的に支援がなされたり、温泉好きの利用者には家族の協力を得て出かけていただいている。馴染みの美容室、以前の勤め先などに出かける利用者もおられる。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者は、相性が良い悪いが日常生活にも多少の影響があり、できるだけ相性の良い入居者同士で散歩や日常の行動ができるように支援している。また、孤立しがちな利用者にはアクティビティで他の利用者とも楽しめるよう努める。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	サービスの終了は、看取りでの場合がほとんどであり、「偲ぶ会」にお呼びして意見交換を行なうなど、途切れない関係づくりに取り組んでいる。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	認知症の人の場合は周辺症状により、個別ケアが基本になるので、一人一人の意向の確認はその都度スタッフが気づきを記入してスタッフ全員が意思の確認に努めている。レビー小体症の方は特に周辺症状による対応に注意が必要。	事業所独自の「気づきノート」で利用者個々の意志や思いを把握し、職員間で共有し合い、好きなことややりたいことは積極的に取り入れ、入居以来、絵を描くことに取り組みまれ、家族が驚くほどの作品を残されている利用者もおられる。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	ご家族からの入居時の聞き取りで、ほぼほとんどの内容について伺い、記録してスタッフ全員が利用者の生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用等について把握できるように努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	入居時にご家族からの聞き取りと共に、入居後は1日の中での変化や気づきをスタッフが記録して、全スタッフが把握できるように努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	日頃の情報がスタッフ全員で記録してあるものを参考にして介護計画が作成されているので、様々な要素が入ったものになっている。	日常の「気づきノート」をもとに、利用者の生活を重視したケアプランが作成され、具体的な支援内容が盛り込まれている。スタッフ会議でプランの確認と周知に努められ、現場のケアとの齟齬が発生しないよう取り組まれている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個別記録に日々の記録すること、日常生活パターンシートにも記録して情報共有をしている。また、全スタッフがそれらを把握できるようにしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	新規利用者を迎える時には、これまでにない要望がだされる場合があり、新しいサービスにつながっている。(飼っていた犬の訪問、入居前に通っていた病院への受診等)		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	法人として、市民へ貸農園を行なっており、市民との接点を持てるように努めている。また、近くの公園へは日常的にでかけ、市民との会話ができるようにして生活が広く豊かになるように努めている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	日頃に往診して下さる医師とは別に、認知症の症状が変化したり、悪化した場合に受診する医師は別にしていて、専門的な治療の必要性を把握している。また、入居前に通っていた病院を継続したい場合は、入居後も継続できるように協力する。	協力医療機関には、日常的にアドバイスを受け、訪問看護STとは24h連絡が可能となっている。かかりつけ医との連携も図られ、通院には職員が同行し、直接情報を伝え、指示を受けることで、適切な医療サービスが受けられている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	訪問の看護師との関係は良好で、特に看取りの場合には連携を密に図っている。それも日頃からの関係性が活かされている結果と考えられる。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	病院関係者との連携は良好である。日頃からの関係性が活かされていると思われ、病院からの相談もある。入院時にはスタッフが度々お見舞いに行き、状況を把握している。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化や看取りが近い場合は早めに連携している訪問看護ステーションの看護師、往診医とホーム管理者、計画作成担当者を集め、ご家族を招いて情報の共有を図っている。また、今後におけるケアの見通しについて家族にも理解、協力を得て進めるように努めている。	ご家族に看取りへの理解をいただくよう、早い段階から医師、訪問看護も交えた話し合いが行われ、今後予想されることなどを共有するよう努められている。利用者、家族、職員の安心できる終末期対応が実践されている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	年に2回の法定訓練時に事故発生対応についても学ぶ機会としている。また、関係者(防災担当者)から外部研修に参加し、急変時や事故対応に備えられるよう実践力に努めている。今後はさらに研修や訓練を増やして行く予定である。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	2か月に1回の運営推進会議で避難訓練等について情報交換をしている。その結果、町内会の防災担当者が当法人の避難訓練に必ず参加してくれている。また、備蓄品のリストの交換をし、互いに備えているものの情報交換をしている。	事業所を取り囲む環境から火災を中心にした災害対策が取られ、放火などに備えて日常的なゴミの処理等についても十分な注意が払われている。町内会の方が建物内外を視察され、災害発生時の協力体制作りがなされている。	災害発生時の近隣との相互協力体制が図られていますので、様々な想定をもとに訓練を重ねられ、課題の修正と全職員の行動が習慣化されるよう取り組まれることに期待します。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	利用者は認知症ではあっても「歳を重ねた尊敬すべき人」という高齢者への普通の感覚で接している。スタッフは日頃のケアにもその視点を重視し、フレンドリーになり過ぎた接し方になっている時にはお互いに注意し合うようにしている。	洋服選び、鏡に向かってのお化粧、身支度などに、利用者一人ひとりの意志を尊重した支援がなされている。また、事業所内外での利用者・家族のプライバシーの尊重にも取り組まれ、様々な事例を挙げた指導が行われている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	利用者は認知症ではあっても「一人の人として」介護する対象者としてではなく、共に過ごしている「人」として自己決定を尊重し、希望の表出も大切にされたケアが自然にできている。例「今日はお風呂どうしますか」という質問で答えを引き出す等		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	上記同様、自己決定を優先したケアを実践している。例：アクティビティに「…があるんですが行ってみませんか」等、利用者がどう過ごしたいか希望をまず聞いて希望にそって支援している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	当グループホームは特に女性の利用者が多く、高齢になっても化粧やおしゃれがいつまでもできるような環境でありたい。毛染め等についても希望者にはスタッフが支援して、こまめに行なっている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	「食べる事が楽しみとなるような支援」は、当グループホームケアの理念の一つである。特に食欲が落ちている時には「好み」や嚥下機能等に配慮した食事づくりに努めている。	一品ごとに小鉢に盛り付けられ、目にも楽しい食事が出されている。利用者にはメニュー決めから野菜の皮むき、食器や調理器具の洗い物などに参加いただき、「食べる事が楽しみになること」を目指した支援が行われている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	メニューづくりの中に栄養バランス、水分量について確保できるように考えて作成している。さらに一人ひとりについての摂取量を把握する為に記録をしている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	口腔ケアについては毎食後に努めているが、認知症の為に入れ歯をはずすことを認識できない方等がいる場合、拒否や抵抗が生じることがある。その場合は本人のできる範囲の口腔ケアを行なっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	認知症の場合に生じる排泄感覚の欠如で、失禁が避けられないが、その中で一人ひとりのパターンを把握し、時間的なトイレへの声掛けや誘導により失禁を減らす努力をしている。結果的にリハビリパンツやオムツの減少につながっている。	認知症と言えども「プライド」や「プライバシー」には十分配慮がなされ、あまり直接的な声かけにならないよう努められている。日によって変わる体調などを見ながら、タイミングの良い誘導で失敗を減らし、オムツに頼らない支援が行われている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	利用者は全般的に便秘の方が多いため、ヤクルトを定期的に購入して食事につけている。また、バナナ、ヨーグルト、プルーン等を提供している。また、毎日の散歩やアクティビティで活動的に過ごしてもらうよう努めている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々に合わせた支援をしている	入浴については、本人に入るかどうかを確認して決めているので職員の都合ではない。午前中でも午後、夜でも入る方がいれば対応している。また、拒否の方はご家族に協力を得て、入浴ができるよう支援している。	利用者の気持ちを優先に、夕食後の入浴やシャワーなどへの対応が行われている。個浴を基本に重度化された利用者には職員が二人対応し、安全で安心して入浴いただけるよう努められている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	利用者の中には早寝早起きの人、日中でも仮眠を必ず取る人などそれぞれであるため、そのパターンに合ったケアをしている。ある人は夕食後間もなく居室に行き休もうとされるが、その場合は食後なるべく直後ではないよう配慮している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	受診後、服薬の内容は記録し、さらに処方箋を個人ファイルにファイリングして皆が共有できるようにしている。服薬後の確認はチェックした人が記録して飲み残しや誤飲を防いでいる。薬局と連携して分包してもらっている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	日常生活で行なって来た役割(掃除、洗濯ものたたみ、食事づくり、食器洗い、買い物等)は継続できるよう支援している。個々の方の楽しみはアクティビティに反映し、気分転換をしていただけよう努めている。法人内に畑があり活用している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるよう支援している	お彼岸等にお墓参りに行きたい方がいて、法人内の移送サービスと在宅時から利用していた訪問介護サービスの馴染みのスタッフが生活サポートとして付き添えるように支援している。散歩は毎日出かけられるように支援。外食、買い物、花見などにも出かけている。	中庭でお茶をしたり、畑の収穫に参加されたり、コンビニや100円ショップでの買い物など、利用者の希望を取り入れながら外出支援が行われている。古代蓮やラベンダーなどを見学し、その様子を写真に収め、家族にも伝えられている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	利用者の中で、本人が家族からおこづかいをもらい自己管理している方や後見人から本人用にとホームで管理を依頼されている方もいる。その場合、買い物で使用した金額を個人の帳簿につけて、金額が把握できるように努めている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	電話をかけることはスタッフが支援しており、携帯電話の持ち込みについても了承している。また、家族や友人から年賀状等が来た場合にも返信できるよう、手紙を出す希望があった場合も支援している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	ホームを建築する時に馴染みのあるたたずまいにしたくて家庭のような雰囲気にした。その為、施設的な感じはない状態である。また、適度な明るさは落ち着きをもたらす。堀コタツや和室、ソファのコーナー等、自由に過ごせる空間をしつらえている。	華やかな装飾は行わず、落ち着いた暖色系の照明にこだわり、「利用者が生活する家」の雰囲気作りに努められている。元利用者の版画や絵画なども飾られ、利用者はそれぞれの居場所で寛いだ生活を送られている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	上記同様、様々な空間を作っていて一人で過ごしたり、気の合った人と過ごしたり自由に行ける工夫をしている。その為にはある程度の面積が必要である。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居時に、居室のあり方についてご家族に理解を得られるように努め、馴染みの家具や掲示物等自由に持ち込んでもらうようにしている。中にはあまり協力的ではないご家族もいるがホームにある家具をお貸しするなど支援している。	居室の出入り口には暖簾が飾られ、木製の表札がかけられるなど、自分の部屋としての配慮が伺われる。ご家族の協力もあり、個々の利用者の個性を活かした居室作りが行われている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	フローア-は、転倒した際でも大きな怪我にならないようにクッションフロア-にしている。また、必要な時には使用できる手すりの設置、入浴時でもできるだけ自立して入浴できるように多めに手すり等の対策をしている。		

(別紙4(2))

事業所名:グループホーム加須ひばりの里

目標達成計画

作成日:平成 29年 9月 11日

目標達成計画は、自己評価及び外部評価結果をもとに職員一同で次のステップへ向けて取り組む目標について話し合います。
目標が一つも無かったり、逆に目標をたくさん掲げすぎて課題が焦点化できなくならないよう、事業所の現在のレベルに合わせた目標水準を考えながら、優先して取り組む具体的な計画を記入します。

【目標達成計画】					
優先順位	項目番号	現状における問題点、課題	目標	目標達成に向けた具体的な取り組み内容	目標達成に要する期間
1	35	災害発生時の協力関係については、町内との関係について大変良好である。しかし、訓練や自己啓発については、現実の災害で全スタッフが完璧に行なえるかどうかという点について100%とは言い切れない部分がある。	現実に災害が発生した場合に、全スタッフが取るべき行動を完璧に行なえるようになる。	全スタッフの意識啓発と実地に向けて、訓練を恒常的に行なえるようにする。	6ヶ月
2					ヶ月
3					ヶ月
4					ヶ月
5					ヶ月

注)項目の欄については、自己評価項目のNo.を記入して下さい。項目数が足りない場合は、行を挿入してください。